

## たからものはどこにでもある。 「探して、磨いて、発信する」アンテナを!



稲取温泉観光協会事務局長

わたなべ りつこ  
渡邊 法子さん

大学院文学研究科中国哲学専攻博士後期課程

静岡県東部に位置する温泉地・稲取は、1990年に約83万人いた宿泊客が05年には約51万人まで減少。06年秋、危機感を抱いた稲取温泉観光協会は破格の待遇で「再生の舵」を託せる事務局長の全国公募を実施した。結果、1,281名の応募者の中からただ一人選ばれたのが、本学大学院で中国哲学を専攻する渡邊法子さん(47歳)だ。

新・事務局長は  
「何もねえところはない」  
が持論

漁師町の人々は概して声が大きく言葉が荒い。

海のそばで、激しい波風の音とともに生きるうちに、それに負けないように話すようになってきたのだと聞いた。

「おめえよ、稲取なんて何もねえのに、何を探すんだよ」

今年4月、事務局長に就任した渡邊さんが、あるものさしがし、みがかいて発信総合プロジェクト」という施策を掲げた当初、町の人々はそんなふうには聞いていなかった。

渡邊さんのまちづくりの基本は、その地域にしかないものを、そこに住む者たちが、もう一度探して磨いて発信

すること。地元の風習や歴史は、住む人にはあたりまえで、かえって見過こされているケースも少なくない。

「おめえっていうのは、ここでは丁寧語よ。え、はい、たか、と、とんでもないわ(笑)。この人たちはみんな大きくて屈託なくて、言いたいことを言い合う。だから、私も思ったことは全部言わせていただくの」。

NPO法人で京都丹後のまちづくりを育てるシンクフルマーが、ついでに現役大学院生もさらに、聞けば聞くほど飛び出す多彩な経歴。「池袋・サンシャイン通りで10代の男の子と意気投合してバンド結成。以来、豊島区でロックフェスティバルを開催(ー)など、ユークなイベントも。何にでも飛び込んでいくエネルギー。経験に裏打ちされた確

固たるビジョン。自然と人に溶け込む柔軟性と、チャームिंगという形容がピッタリの彼女を、誰もが放つてはおかない。就任後の数カ月でメディア対応や講演は120本にものぼった。

「こらうしえ稲取」大作戦！  
住民主役のまちづくりを  
コーディネート

予想外の反響に、本来の業務がでない苦しみも抱えた。だからこそ、いち早く組織と人の問題に切り込み

根幹づくりを始めた。町内全戸に呼び掛けて55名のボランティアを集め、全町民を巻き込んだ取り組みもスタート。その部は今年5月の旅行業法の規制緩和という機を捉え、この秋に事業化するところまでできている。「立場が異なれば当然利害関係が生じるが、自分のまちを良くしたいという思いは共通。その思いを軸に、ひとつにまとめるのがコーディネートとしての私の役割です」。がらりと稲取の地に足をつけている。

ロック中心だった大学時代は決して勤勉ではなかった。イベントとして聴



ほぼ毎日更新されるブログでは、自らまちを歩いて発見したことを綴る。渡邊さんらしく、住民でも知らないような歴史の逸話に彩られている。必ず稲取に行きたくなる!  
<http://www.inatorionsen.or.jp/>

くと痛快だが、卒業後、銀行勤務、家計を支えながらの子育て、そして大学院進学を経て現在に至るまでの道のりはまさしくデコボコの連続。現在のスーパーワーマンぶりからすると考えにくい、絶望の淵で生死を考えたことさえある。それを乗り越えられたのは、学んで新しく深い世界を知ることであり、そこで知り合った人々とのつながりだ。大学は何にも縛られることなく、世代や価値観を超えて人々の学びの瞬間を大切にしたいですね」。

海の向こうに  
歴史と未来をみつめて

稲取の海を見ていると歴史が迫ってくる気がする、という。海に囲まれた地形の稲取は、陸よりも海を経た文化が多く伝来し、各所にそれを示す史跡が残る。将来の夢は日本と中国を結び力になること。「日本文化の礎が中国大陸からやってきたのは紛れもない事実。その史実をしっかりと理解することが、中国という次世代のフィールドとの新たな関係を築くはず」。任期中は大学院を休学するが、学びの先にある強い意志をのぞかせた。

「ここは何もねえ」と言った町の人々はプロジェクトに参加するうちに、これは売りになるかも、という素材を再発見し始めた。強い波風を背に、海の人々に負けない声で渡邊さんは言った。「探して磨けるものって、まちにも人にも必ずあると思うの」。

その言葉は、今はデコボコ道の途中で、自信が持てずにいる私たちを勇気付ける、とても力強い言葉だ。

